

カトリック 仙台教区報

2018年12月2日 No236

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>

「平和旬間ミサ」 in 盛岡 四ツ家教会

去る8月12日(日)、盛岡の四ツ家教会に平賀徹夫司教を迎えて「平和旬間ミサ」が捧げられた。この日は盛岡の四ツ家、志家、盛岡上堂の三教会合同ミサとなり約150名の信徒が、司教司式による「平和を求めるミサ」にあずかることができた。

説教の中で司教は、1965年、当時の教皇ヨハネ23世の呼びかけで開かれた第二バチカン公会議において発布された『現代世界憲章』の78項を引用し、平和は「正義が造り出すもの」と定義し、平和は永久的に獲得されたものではなく、たえず求めて祈り建設されるべきものと表記されていることを述べた。さらに「教会は毎年元旦の神の母聖マリアの祭日から平和を求めて祈り続けています。しかし、それだけでは十分ではありません。個人の人權が守られること、個人の福祉が、神が創造された一人ひとりが大切にされることが、平和にとって最も必要な事であり、平和を求める私たちにできることではないでしょうか」と説かれた。

「なぜこのことを話すのでしょうか?」と司教が私たちに問いかけ、後段では司教が積極的に関わっている日本カトリック部落差別人権委員会の活動について話をされ、部落差別による冤罪事件とされる「狭山事件」について、裁判のやり直し再審請求がいまだに認められていない厳しい現況の報告があり、

石川一雄被告の無罪を勝ち取るためより多くの関心と理解を呼びかけ、多くの信徒が感銘を受けた。

司教は最後に、「洗礼を受けたものとして、与えられた使命に対して自分はふさわしい生き方をしているのだろうか?と反省し続けていくことが大事なことです」と説教を結ばれた。

ミサ後は談話室でささやかな茶話会がもたれ、信徒の皆さんはお元気な司教との再会を喜び、懇親のひとつときを楽しんだ。



第3地区 四ツ家教会

仙台教区のうごき



【司祭評議会報告】

司祭評議会役員会が6月19日(火)、7月3日(火)、同定例会が5月15日(火)、8月7日(火)に教区本部において開催された。これらの会議は8月末に開催された仙台教区司祭の集いに向けた準備の会議であったため、以下で2018年夏期・司祭の集いの内容を紹介したい。

司祭の集いは8月27日(月)から28日(火)の二日間にわたって、岩手県八幡平マウンテンホテルにおいて開催された。参加者は平賀司教以下司祭

23名。前回の集いからの継続課題であった『葬儀のしおり』に関する最終確認等が行われるとともに、宣教司牧評議会の課題に関する話し合いも行われた。また懇親会においては本年10月1日に仙台教区（北仙台教会）から離任されるライモンド・ラトゥール神父への感謝も表された。

集いにおける一日目の話し合い要旨は以下のとおりである。

1. 『仙台教区内小教区における葬儀について』を読み合わせた。
2. 主日ミサで死者の追悼の意向を受ける場合等の司祭団として取決め事項を確認した。
3. 「納棺の祈り」、「火葬の祈り」、「埋葬の祈り」については本冊子末尾に信徒が司式することが出来るように式次第を添付した。
4. 上記司式信徒の養成に関しては、各地区に派遣された司祭チームと地区連絡協議会（あるいは各小教区）で対応することとした。
5. なお本冊子は年内をめどに各小教区に送付されることになる。

二日目の地区ごとの話し合いにおいては、次回宣教司牧評議会定例会（9月24日開催）の議案である「拡大版宣教司牧評議会（仮称）」について意見交換し、司祭代表に意見を託した。この内容については、宣教司牧評議会報告を参照。

會津 隆司 神父

【宣教司牧評議会報告】

仙台教区宣教司牧評議会定例会が、9月24日（振り替え休日）、司教区センター（元寺小路教会）において開催された。平賀司教はさいたま教区の司教叙階式に出席のため、本会議は司教欠席での開催となった。参加者は各地区からの信徒代表者8名、2地区合同で選出された司祭代表者4名、さらに修女連代表者など19名の参加だった。



議案は、宣教をテーマとした「拡大版宣教司牧評議会（仮称）の開催」の是非、開催の準備に当たる実行委員会設立の是非、そして開催の時期についての大まかな決定であった。

しかし、本会議に向けた各地区内での準備の時間的制約、地区内の小教区の距離的な問題などで、各地区が議案書について地区内での十分な審議をへての会議とはならなかった。そのため、「拡大版宣教司牧評議会（仮称）の開催」については、大きな反対はなかったが、中身については十分な共通理解が得られるところまでは、進めなかった。

したがって、いったん、役員会に差し戻し、そこでさらに今後の方向性を見極めた上で、再度提案し直す事となった。今後は、役員会の審議の結果を、各宣教司牧評議員らにフィードバックしながら詳細について、まとめていくこととなった。したがって、実行委員会の立ち上げ、開催時期などは、役員会と司牧評議員らとのやり取りの中で、決められることとなる。

午後からは、宣教司牧評議会の下で活動している各団体からの報告と連絡が行われた。

小松 史朗 神父

各地区からのお便り

第4地区より

研修会開催報告



2018年6月17日（日）午前10時より一関教会において第4地区研修会を開催しました。

「主日（日曜日）に集まることの意義（意味）について深めよう」のテーマのもとに第4地区（大船渡、気仙沼、水沢、千厩、築館、一関6教会）から50名の参加者により研修が行われました。

話し合いのテーマ

- A. 教会に集う私たちは共同体としての意識を持っているか？
- B. 信仰共同体としての主日に集まるための具体的な方策を考えているか？ 信仰の継承をどう考えているか？
- C. 宣教共同体としての意識をどこに見つけていくか？

この3つについて佐藤守也神父様から基調講演をしていただきました。

司祭が中心だった小教区の今後について、地区制になって主日のミサがどこの小教区でも行われにくくなってきた現状について、宣教のあり方について、話し合いのための導入として講話をしていただきました。

その後8～9人のグループに分かれてA、B、Cのテーマについて話し合いが行われました。

昼食を挟んで、今度は小教区ごとに集まり午前の話し合いを踏まえて今後の方向性を見いだすための話し合いが行われました。

最後に全員が聖堂に集まりそれぞれの小教区のまとめを報告し、ミサの後午後3時に解散となりました。

今回のテーマや進め方は昨年の教区の司牧評議会で示されたものであり、内容的に難しいものがあると思われましたが、実際には小グループでの話し合いを通して身近な出来事やそれに関わる個人の話など共同体としての意識を深め合う研修会になったのではないのでしょうか。

西田 泰樹（一関教会）

第4 地区連絡協議会

2018年9月15日(土) 於 築館教会司祭館

参加者は神父2名、各教会代表者12名、修道会1名、計15名、神父1名(資料提供のみ)

お祈り、自己紹介後議案に従い協議が行われました。

議案1は司牧評議会で提案されたテーマに基づいて開催された研修会(6月)をふり返り、良かった点良くなかった点。議案2は司牧評議会から提案された「拡大版宣教司牧評議会(仮称)」の開催について。議案3はその他(次回開催場所、日時)、報告として施設整備協力制度委員・広報委員より、各教会より近況報告。



議案1について、良かった点として第4地区として初めての研修会が開催されたこと、各分科会とも活発に話し合われたこと、大会の運営がスムーズに予定通り行われたこと。良くなかった点は各テーマについてまとめるまでに至らず分科会で話し合わ

れた内容の発表で終わったこと。

議案2について各教会の代表から意見が述べられ、緊急で重大な課題であることは認識しているが拙速(せっそく)である。信徒、小教区、地区がそれぞれふり返り反省した上で実施すべき、一歩ずつ段階を踏んで実施すべきとの意見で一致した。

各教会とも高齢化社会を迎え、年金受給者、介護を必要とする信徒の増加、交通手段の確保(運転免許証返上、バスの本数減)が難しく、車イス生活者(バリアフリー)も増えている。結果として信徒が減少、教会維持費の減少が顕著である。後継者の育成の問題も含めて、三世帯同居は珍しく、独居老人・老夫婦二人だけの世帯が多くを占めるようになり、目前に迫るお墓の問題が現実味をおびている。教会で熱心な信徒として、信徒をリードしてきた方が急死したり、教会に来られなかった際など後継者の問題がおきます。役員を引き受ける方がいなかったり、いったん役を受けると長期間、覚悟しなくてはならない。

信徒、各教会、各地区が信仰や運営について、真剣になればなるほど疑問や課題が浮かび上がってくる。

それぞれの課題や問題に対して、個々人や教会ごとに向き合い対応するよりも教区全体の問題として真摯(しんし)に取り組んでいくべきと考えます。司教様を中心に司祭、修道者、信徒が一体となって、信仰の道を力強く誇りをもって歩んでいくことを願っています。

佐々木 英二(築館教会)

第6 地区より

第6地区大会(教区研修)

2018年9月16日、本年度の仙台司教区第6地区大会(教区研修)が、元寺小路教会を会場に開催されました。

初めに、原町教会幸田和生司教から本年度のテーマに沿って「主日に教会に集まることの意味」についての講話をいただきました。

講話の中で幸田司教は、司祭不足の現実の中で何を大切にすべきか、という課題について考えを進める上で、教会の本質的使命である三つのことを示されました。

その三つは、
「キリスト教信仰を伝える・福音を告げ知らせる」
「共に賛美と感謝をささげる(典礼を行う) 賛美・感謝・嘆願 祈ること」
「愛を生きる(互いに助け合い、周りの人を助ける)」
ということです。

この三つは、どれが欠けても、教会が教会とは言えなくなってしまうほど重要な使命です。

その使命を実現するために、「宣教」そして「司牧」という言葉が示されています。この働きは、教会のウチ、ソトどちらに向けて、何をするのか、と

いう問題ではなく、教会自身の使命として生きること、です。そのために主日の集いは不可欠なのです。

講話の終わりにあたって、幸田司教は私たちに三つの問いかけをなさいました。

「ミサとは何か?」「司教・司祭とは何か?」「説教とは何か?」ということです。

講話の中で司教はその答えを示されませんでした。

その答えは、私たち信者自身が、日々の信仰生活の体験の中で、感じ取り、考え続け、そして生きていくことなのでしょう。そのことを、私たち信者は示されたのだと思いました。

幸田司教の講話のあと、講話を聴いて感じたこと、心に響いた言葉、新たな気づきなどを小グループに分かれて分かち合いました。



「分かち合い」はこれまであまり行われてこなかった方法でしたので、戸惑われる方も少なからずおられたようでした。「いいお話を聴くことができた。」という声も聞かれましたが、その中でどのようなことが分かち合われたか、それを全体で発表したり、まとめるような方法はとりませんでした。そこで一人おひとりが受け止められたことは、それぞれが感じられたものをそのままに持ち帰り、各自の中で、小教区の活動の中で、時間をかけ豊かに育てていただければと思います。

最後に当日の分かち合いを進めていく上で、メモがありますので、今後分かち合いを行う機会があれば、ヒントにしてください。

幸田 和生 司教

* 少し時間をおいて、テーマや講師のお話の中で心に響いた言葉、フレーズや、気づいたことなどを思い起こしましょう。

* 話す順番を決める必要はありません。自分が思ったこと、感じたことを素直に話しま



しょう。最初に口火を切るのには勇気が必要かもしれません。でも、必ずそれを聞いて受け止めてくれる人がいます。躊躇（ちゅうちょ）することなく、思い切って話してください。

* 分かち合いでは「聴く」ことが大切です。耳ばかりではなく、眼も心も全霊を傾けて聴きましょう。

* 話し手の言葉を聴いて心に響いたこと、（共鳴できたこと）を大切にしましょう。

* 人の話に口をはさんだり、評価したり、解説したり、反論したりしないこと。

* 話せないこと、話したくないことは無理に話す必要はありません。また、他の人はそれを無理に聞き出そうとしないでください。分かち合ったことはまとめたり、記録したり、また、そこにいない人に話す必要はありません。安心して話せることが大切だからです。

* 分かち合ったこと、分かち合いをうけたことが、私たちにとってどれほどの恵みであったか、そのことに感謝しながら終わらしましょう。

小田島 輝夫（一本杉教会）

第5 地区より

2 年ぶりの地区大会開催

7月1日東仙台のナザレト幼稚園を会場として第5 地区大会が行われた。6 小教区より約 180 名の信徒が参加し、大会テーマ「主日に教会に集まる意義」について平賀司教様の基調講演を聞いた。その後、参加者が5つの分科会に分かれて話し合いや交流を行った。午後は司教司式による合同ミサにあずかった。



基調講演「主日に教会に集まる意義」は仙台教区は司祭が減少している。主日の充実した祭儀が必ず行われるとは限らない。主日のミサの重要性は、1962 年に開かれた第二バチカン公会議で教皇ヨハネ 23 世がカトリックの現代化を唱えられた中でミサの大切さを強調された。教会はキリストの復活の過ぎ越しの祈りを8 日目ごとに祈る。キリスト信者はひとつに集まらなければならない。そして感謝の祭儀を行うこと。これが重要である。主日に集まることに大きな意味がある。との話をいただきました。

5つの分科会は「分かち合いグループ」「朗読を学ぶグループ」「聖歌を学ぶグループ」「子どものグループ」「聖堂訪問グループ」で聖堂訪問グループは会場周辺に点在し訪問する機会も少ないオタワ愛徳修道女会、大阪聖ヨゼフ宣教修道女会、司教館、東仙台教会の各聖堂訪問を行い静かに祈りを捧げ、素晴らしいアジサイの咲き誇る庭や司教館のステンドグラスの輝きに感動しました。ともに祈る場所があることは私たちにとって大切であり原点であり、ここから始まることを実感した一日でした。

岩崎 千秋（北仙台教会）

第1地区より

第1地区合同ミサ



平成30年6月17日（日）9時30分から、恒例の合同ミサ（本町、浪打、弘前、黒石、五所川原5教会合同）が、レネ神父様とミゲル神父様の司式で、今年は浪打教会で行われました。参加者数187名。当日は父の日でもあり、私たちのファザー2人の神父様へ信徒からお祝いのプレゼントが贈られました。

ミサの後には本町教会、浪打教会の女性部による豚汁が振舞われ、浪打教会と隣のカトリック幼稚園を会場に会食をしながら親交を深めることが出来ました。最後は全員で記念撮影。私は広報係の特権とは言わないが、本町・浪打両教会の豚汁を頂きお腹いっぱい。どちらの豚汁も甲乙つけ難いおいしい豚汁でした。

張間 成就（本町教会）

第7地区より

聖母の被昇天ミサ

今年と昨年の被昇天のミサは若松教会で、会津三地区合同で行なわれた。南会津教会からの参加はなかった。今年の夏は大変暑かったが、閑散とした聖堂はそれを感じさせなかった。信徒は高齢化し子どもの姿はそこにはなかった。

昔の教会は子どもたちのざわめきや泣き声が聞こえ、それを諭す人の声が聞こえた。今となっては懐

かしい光景になってしまった。教会は若さにあふれ、活気に満ちていた。昔の教会を思い出して懐かしむ話をよく耳にする。しかし過去の教会にしがみついても何も変わらない。未来を模索しなければならない。時代は変わり、日本の社会構造も少子高齢化を迎えた。司祭も信徒も高齢になり、人数も少なくなった。

ミサ後、祝賀会が行われた。ダルク（DARC 薬物依存症者回復支援施設）の人々が来るようになり、外国の人々も参加するようになった。教会は震災時に少なからぬ貢献を地域に行ってきた。高齢化社会を迎え、教会が地域の高齢者の活動拠点になったり地域の外国人にコミュニケーションの場を提供したり等、地域に開かれた教会作りを目指すときだと思う。

真部 賢二（喜多方教会）

第8地区より

第8地区の集い

9月17日 於 カトリックいわき教会

9月17日「主日のミサに参加する意義」をテーマとして第8地区の集いが開かれました。

開会式の後、歌集「平和を祈ろう」の作者末吉良治氏の「主日に集まる意味を深めよう」をテーマとする講演がありました。講演の前半はお話を、後半は末吉さんの選んだ歌を全員で歌いました。

前半のお話は、「良治」という名前の由来から始まり、キリスト教との出会い、神学校へのあこがれ、求道者としての生活、そしてフランシスコ会に入ったことに及びました。

初めて教会に入って、キリストの十字架を見たときの感動。なんて美しいと思い、言葉にならなかったこと。信者さんたちに歓迎してもらい、人を迎える心、その背景にあるのはすべての人を受け入れる神様であること。そして自分の中に、わき出る思いが強くなり受洗したこと。その後、名古屋で働くようになったときは、求道者として、1週間に10日といえるほど教会に入り浸ったこと。日曜のたび、ミサをハシゴして、1日4回ご聖体をもらったことがあること。フランシスコ会に入ったのは、神様とつながっている人たちと、ヨコでもつながりたいと思ったためであることなどお話しになりました。

そして、なぜ、日曜日に教会に行くのか、との問いに「決まり事だから」という答えは自分の気持ちから発する答えではない。主日のミサは典礼にあずかり、恵みを受け取ることから始まり、そこで多くの秘跡にあずかる。この尊さは他の場所にはないと思う気持ちが先にあるのではないかと述べられました。

後半は末吉さんの歌とギターに合わせて全員で歌いました。そして、歌い慣れた頃、異なる歌を同時に歌うスタントコーラスをやりました。祭壇に向かって左側の人たちは「神さまといつもいっしょ」、右側の人たちは「アーメンハレルヤ」。相手を押しつぶすのではなく、一緒に違う歌を歌うのです。歌い終えて大

きな歓声が上がりました。私たちの心をひとつにくくれる音楽のワザでした。

昼食をはさんで、午後は「主日のミサに参加する意義」について、アンケート結果をもとに各教会から発表がありました。

発表終了後、平賀徹夫司教の司式によりミサが行われました。

ミサの後、閉会式となり、エテメ神父と板垣神父による集いの総括の後、次回の集い担当の白河教会代表の挨拶がありました。 小湊 博子（郡山教会）



各地のサマーキャンプなど

県南 4 教会の教会学校

大河原・角田・白石・亘理教会の子どもたちの集まりを月に 1 回しています。「イエスのフレンドたち」というグループ名ですが、今回は 7 月 20 日・21 日にかけて白石教会でサマーキャンプを行いました。参加者は 11 名 小学 3 年生から高校 1 年生まで テーマは「神のことばにしたがったアブラハム」です。一日目は熱中症を避けて、プールで遊び、岩風呂に入って、夜は室内焼肉大会、その後、恒例の花火をしました。翌日、低学年グループは アブラハムが主の声に従って、旅だった話を劇にしました。高学年はアブラハムがイサクを捧げることについて、グループでディスカッションし、それを発表しました。その後、皆でミサの準備をして、パウロ神父様を囲んで子どもとともに捧げるミサにあずかりました。



二コ神父様も時間の許す限り参加していただき、充実した時間を過ごした子どもたちは大満足で帰路につきました。4 教会の信徒の皆様のおかげでサポートによって実現したサマーキャンプでした。神に感謝。

Sr. 内田 雅（マリアの宣教者フランシスコ修道会）

野田町教会・松木町教会・郡山教会の教会学校合同夏期合宿



7 月 16 日（海の日）に、野田町、郡山、松木町の 3 つの教会学校の子どもたちと保護者 32 名が郡山ザベリオ学園のテリア館に集いました。午前中、板垣勤神父様のお話とミサ。午後は、ラオスの子どもたちのために学校づくりをしている穴戸仙助さんからお話がありました。それぞれの内容に深い感銘を受けました。また、昼食後は、ケーキのデコレーション大会や、外でのスイカたたきをやったりと交流をはかり、子どもたちは大変盛り上がっていました。次は子どもたちの感想です。

「神父様の話では、サムエルが神様に呼ばれているのがわかりました。ふつう何度も呼ばれたらイラッくと思います。サムエルは、素直に何度も来て感心しました。ヘレンケラーの話は、目が見えない、耳が聞こえないのに多くの人々を元気づけたのです。すごいと思いました。そして、目が見えなくても耳が聞こえなくても神様は愛してくれる事がわかりました。私たちがどんな失敗をしても神様は、愛してくれるから神様の愛は、とても深いと思います。感動しました。午後のラオスの子どもたちの話では、内戦のため私たちと全然違った環境で生活しているので大変だと思ったので助けてほしいです。最後の手足のない人の動画は、すごい生き方をする人だと思った。私も人の役に立てるような人になるために勉強を頑張りたい。」



駒田 瑞穂（松木町教会）

仙塩 8 教会 教会学校サマーキャンプと巡礼

仙塩 8 教会のキャンプ、8 月 3 日（金）4 日（土）、仙台市青葉区青野木の「ドミニコの家」にて、テーマは「世界のみんなきょうだいさ」、参加者は小学生 16 名、中学生 1 名、高校生 3 名。教会ごとの人数は元寺小路 8 名、北仙台 3 名、八木山 3 名、一本杉 2 名、塩釜 1 名、他地区（福島野田町 2 名、高松教区松山 1 名）3 名です。



ドミニコの家近所のツリーハウスにて

子どもの祈りの集い 米沢・二本松巡礼

仙塩地区（かつての中央地区、今の第 5・第 6 地区の在仙 7 教会と塩釜教会）8 教会の日曜学校担当者でつくる教師会では、7 年前から年に数回「子どもの祈りのつどい」を開催しています。うち毎年 2 月のつどいは広瀬川の殉教碑への巡礼ですが、このテーマに合

わせて昨年から 6 月のつどいを、近隣の殉教地への日帰り巡礼バスツアーとし、昨年は岩手宮城県境の大籠の殉教公園と、石巻のサンファン館を訪問しました。

今年は 6 月 23 日（土）、お隣の新潟教区に属する米沢市内の北山原、糠山の殉教地と米沢教会、さらに福島の二本松教会と油井供中河原の殉教地を訪れる巡礼ツアーを行いました。子どもの祈りのつどいとしていますが、参加者は 2 歳から 88 歳までの大型バス満員約 60 名、神父様も 3 名ご参加いただきました。



米沢北山原殉教公園にて

列福から今年で 10 周年となる、1629 年の米沢の殉教者 53 名と、1632 年の二本松の殉教者 14 名に祈りを捧げ、今はあまり歌われないカトリック聖歌集 407 番「おおしくも」を参加者全員で高らかに歌った歌声が、天国の殉教者に届いていれば幸いです。来年もまた新たな行き先で実施する予定ですので、ぜひご参加ください。

荒賀 久仁夫（元寺小路教会）

盛岡小教区 教会学校サマーキャンプ

7 月 29～30 日、花巻市石鳥谷町の戸塚森森林公園キャンプ場にて、教会学校サマーキャンプが開かれました。参加者は、小中学生 5 名 高校生（サブリーダー）2 名 育成部 家族等 6 名 神父・神学生 3 名で合計 16 名でした。

テーマは、「平和の大切さ」「力を合わせて作業することの楽しみ」です。



教区の諸活動

勝谷太治司教をお招きしての平和旬間ミサと講演会

2018年8月12日(日) 元寺小路教会大聖堂において

～信仰から見るそれぞれが抱く平和への思い～

カトリック正義と平和仙台協議会では毎年平和旬間に講演会を開催しています。

今年は札幌教区長であり日本カトリック正義と平和協議会会長の勝谷太治司教をお招きしました。

この日は「平和を求めるミサ」に参加する信徒で聖堂はいっぱいでした。その後の講演会にも130名程がご参加くださいました。

ミサは勝谷司教、パウロ神父、イソク神父との共同司式で行われました。司教の澄んだ歌声が聖堂に響き、お説教では相手の立場を理解することの大切さをご自身の体験や身近な方の例をあげて話され、現代の教会がかかえている問題についても分かりやすくお話くださいました。

勝谷 太治司教



その後につづく講演会では、教皇フランシスコの大勅書にみる「正義といつくしみ」を引用し聖書の箇所もいくつか用いて話されました。

イエスの時代の悪とは多くの災難、病気、あらゆる災いを罪の結果そうだったとか、悪霊の仕業にしていたようです。しかしイエスの考え方は病気の癒しそのものではなく、それを通して正常な人間関係への働き、神との関わり、精神的な痛みへ働きかけるものでした。

その例としてザアカイの話もされました。司教の解釈では回心してイエスに近づこうとしたとは思えないということです。彼は有名人が来たからどんな人か見たかったが、皆に遮られてしまう。先見の目があったようで、先回りして木の上から高みの見物をしようとしていた。そこに来たイエスからザアカイに声をかけ家に行きたいと言った。罪人と言われる徴税人、今でいうと暴力団の組長の家に泊まり食事をするようなこと。そのくらいスキャンダラスなことをあえてイエスは平気で行ったと。彼に対してあなたは変わりなさいなどの説教めいたことなどはしないで、そのままのありのままのあなたを神はいつくしんでいることなどを態度で示された。何を言ったかは聖書には書かれていませんが、非難などしないで包み込むようなまなざしで彼の心に問いかけた。だからこそ、ザアカイの心が動き回心したのだと語られました。私たちが思いもよらない時に神のほうから先に近寄ってくださる。私

たちの悔い改めが先ではなく、まず神の憐みといつくしみが注がれ神に愛されていることに気づいていけるということについて話されました。キリストのもたらす正義は「力」によるものではなく「愛」です。自己犠牲や自分が傷つくことも覚悟して相手に対する自分のあり方を変えることも必要なのだとも話されました。

また、現在の北東アジア、特に北朝鮮の問題にも触れ、韓国やアメリカの対話への姿勢を歓迎しました。沖縄の問題に対しても基地問題に反対と言うのではなく、長い歴史の中で沖縄の人々の人権や差別の問題であることを理解しなければならないこと。戦争については正しいことなどありえないとも話されました。武器を捨て武力の行使を非合法化する、核の問題に対しても日本は参加していないが核兵器そのものを非合法化する考え方が世界では進められていることを紹介しました。日本司教団の死刑制度に関する一致した見解、日本カトリック正義と平和協議会の会長としても司教団の立場にのっとり、いのちの尊厳が侵害されるような社会的な事象が起これば福音の立場から社会に警鐘を鳴らし、日本の教会に問題の共有と解決のための行動を働きかけることをミッションとしていることなどの説明もありました。個人の身のまわりで起きる出来事での向き合い方から、大きい意味での人権や平和についての幅広い大変有意義なお話でした。キリストがもたらす正義は「愛」であるヒントをいただきました。

私自身も正義や平和を求める時にまず前提とするのは、正論をかざすのではなく共感するセンスが必要なのだと痛感しました。



講演の最後に盛大な拍手が司教に送られ、平和旬間講演会を無事に終えました。

ご多忙の中、来仙くださいましたことを心から感謝申し上げます。

木元 範子（北仙台教会）

日本カトリック医師会仙台支部総会・公開講演会報告

日本カトリック医師会仙台支部では、2018年7月8日（日）、カトリック元寺小路教会で、平成30年度総会を開催しました。これに先立ち、山浦玄嗣先生を講師にお迎えして「人生の終わりに考える大切なこと」との演題で、公開講演会を行いました。

参加聴衆は約130名で、会場の信徒ホールは、満杯の状態となりました。1時間半の講演内容を以下に要約します。



山浦先生がクリニックで外来診察をしていると、大多数の患者は老人で、「先生、おれは死ぬんだべがネ？」と聞いてくる。答えは二つ。「当たり前ですよ。人は皆死にます。心配することはない」、もう一つは「他人は死ぬ。でもあなたは死なない。なぜなら…自分が死んだことを自覚できないから」…。こんな諧謔（かいぎやく）から始まる先生の講話は、臨死体験をするβエンドルフィンの作用で死そのものは恐ろしくなくなるといふ話、そして、臨死体験の向こうの世界、つまり仏教の六道の世界の話、さらに縄文時代からの精霊信仰の話へと果てしなく広がっていく。ようやく、キリスト教における死の世界の話になり、「アガパオー」という動詞を「愛する」と訳したのは、ほとんど誤訳であるという話になる。そして、「他人の死は観

察できても、自分の死は体験できないのだ。それならば我々は死そのものを恐れることはないであろう。神さまは自分の子である我々がかわいくないはずがない。きっと悪いようにはなさない。そう信じる」と結び、講演の最後は、次の言葉で終わりました。そのまま引用させていただきます。

人は何のために生きているか。

答えは単純だ。人は人に褒められたくて生きている。「あなたは本当に素晴らしい人だ」と言われたくて、生きている。そのためにはどんな困難にも立ち向かう。どんな苦しみをも耐え忍ぶ。どんな苦しい人生でも、ああ、生きたかいがあったなと思える。

人生の終わりに近づいているとしても、それが何だというのだろう。生きる限り全力を尽くし、自分もまた他人も互いにいつでも明るく元気で喜びに満ちて生き続けることに力を尽くすのが、人としての務めだと思う。人はその関心と行動のベクトルが自己に向いている時は幸せではない。他者に向いている時こそが本当に幸せだ。死ぬまでそうでありたい。

以上のような内容でした。さらに、詳細な内容については、山浦先生から講演原稿をいただきましたので、原稿コピーをご希望のかたは、仙台支部事務局まで、ご一報ください（FAX 022-265-5784）。

なお、当日、スピーカーの充電切れで、お聞き苦しい点があったことをお許しください。また、参加人数が多数で、イスの数など不十分で、皆さまにご不便をおかけいたしました。イスの設置などお手伝いいただいた方々、ありがとうございました。

講演会終了後、昼食、懇親会、総会と進行して、日程を終了いたしました。

我妻 恵（元寺小路教会）

石巻ベースで「七夕祭り」



ジェンカを踊りながらのゲーム

仙台教区サポートセンターが運営する石巻ベースでは、7月7日恒例の「七夕祭り」が今年も実施された。

来場者は、大人50名、子ども5名、計55名、ボランティアに駆け付けた「チーム・カリタス仙塩」や「心の港」など26名、スタッフ4名が参加した。

午前11時からのスタートの予定が、小雨の中30分も前から普段このベースを利用している方々が集まって来られた。

ベースの裏にある駐車場に、テントを張り巡らせて準備していた飲食コーナーで、カレーライス、フランクフルト、玉こんにゃく、ジュース、ラムネなどが提供された。子どもコーナーとして、金魚・スーパーボールすくい、輪投げなども好評だった。

七夕の飾られたオープンスペースでは、歌あり、踊りあり、ゲームありで大いに盛り上がりを見せた。

今回の「七夕祭り」は、ベースの利用者の方々と共に作り上げた祭りで、約1か月前から、オープンスペースでの七夕飾りの作成や、祭りを盛り上げる「盆踊り」「花笠音頭」を先頭に立って踊る人、民

謡を歌う人など、普段のベース参加者が進んで企画し運営に参加してくださったとのこと。スタッフは、「石巻ベースは被災された方々と、ボランティア、スタッフとの関係がとても良い方向に向かっています」と話していた。

岩井 誠(一本杉教会)

信徒さんコーナー

今回より、信徒さんの活動（地区レベル、小教区レベルではない活動）を自由に投稿できる欄を設けました。皆さま方の積極的な報告を、お願いいたします。

秋田への巡礼

秋田のマリア様を訪ねて

6月2日（土）ようやく念願になって有志四人で秋田の聖体奉仕会に行ってきました。

リゾートしらかみ2号に乗り、風光明媚な西海岸の海の青さとそそり立つ奇岩のコントラストの美しさを眺めながら13時33分に秋田駅に到着しました。



聖体奉仕会前にて

駅前よりタクシーに乗り20分ほどで目的地に着きました。パンフレットなどで知っていましたが、目の前には、広々とした緑豊かな敷地に、威光を放つような建物が静かにたたずんでいました。

まず、百一回も涙を流されたというマリア様に恐る恐るお会いしに行きました。マリア様の表情にびっくりしました。私たちが教会で目にするマリア様は、かすかな笑みを浮かべ、私たちを包み込むように両手を

広げていらっしゃるのに、表情はとても硬く悲しそうに見えるのです。社会のいろいろな悪徳や私たちの罪深さを嘆き悲しんでいるのでしょうか。とても神秘的なお顔に見え、なかなかそばから離れることができませんでした。そして、今は、その悲しみをじっとこらえているのではと、心に深く感じられた瞬間でした。

絵ハガキなどでは涙のあとがはっきり見えるのに、私たちの目にはみえませんでした。

拭き取ってあげたのでしょうか、それとも自然と体内に浸み込んでしまったのでしょうか。

神秘的なマリア様にお会いできたことに感謝し、しばらくお祈りをしました。

そのあと、澄みきった広大なお庭を散策しましたが、ササヤと木の葉が揺れる大自然の中に身を置き、別世界におかれている自分にしばらく酔いしれていました。ところが、なんとお庭は十字架の道行になっていることに驚かされました。あまり時間がなかったので、簡単に十字架の道行をし、心地よい雰囲気包まれ神に感謝して、市内のホテルに向かいました。

次の日は、千秋公園のそばにあるカトリック秋田教会の荘厳なミサに参列しました。ミサの司式は前日、聖体奉仕会のお庭で会った神父様でした。

聖体奉仕会を訪問できたのは、神様の大きなお働きによって実現できたものだ、そのお恵みに深く深く感謝しつつ帰路に着きました。神に感謝。

岩谷 松代（五所川原教会）

訃報

氏 名：マリア・カリタス 世界 アイ子（コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会）
生年月日：1926年2月16日
初誓願：1953年9月8日
永久誓願：1959年8月30日
死亡年月日：2018年7月9日

司 祭 紹 介

広報委員会は、神父さまがたをご紹介するにあたって、次の4つの質問をいたしました。

- (1) 司祭になりたいと思った動機（きっかけ）はどのようなことですか？
- (2) 司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか？
- (3) 今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒へのよびかけ（希望）があれば、教えてください。
- (4) その他、神父さまを知るためのエピソードや、アピールなさりたいことなどなんでも。

シャルル・エメ・ポルデュック（ケベック外国宣教会 野田町教会）



①「どうして私は司祭になったのか。」その質問に対して、ただ一つの答えがあるだけです。神様から呼ばれて、選ばれているという気がするからです。神様が私を選び私に呼び掛けたのは、いろいろな人を通して、いろいろな出来事を通してでした。

私は1942年、男3人女3人の6人兄弟の農家の長男としてカナダに生まれました。毎日、素朴な暮らしの中で、両親と兄弟たちの愛で満たされた、あったかい喜びの雰囲気を感じていました。毎日、家族8人そろって食事をしていました。皿洗いや片付けが終わると、いっしょに晩の祈りをしていました。それから、父は私たちに新聞を読んでくれて、社会や世界のさまざまな問題を、わかりやすく説明してくれました。兄弟たちといっしょに農業を手伝いながら、家族との生活と、大自然の暮らしを満喫していました。

12歳のときに寄宿舎に入りました。あたたかい家族との生活から離れてしまったことで体験した寂しさは、私にとって初めてのショックでした。

さらにまた、寄宿舎に入って二か月後、同じクラスのG君が野球の試合の中で頭にボールがあたり、翌日亡くなるという出来事が起こりました。G君が急にいなくなった寂しさ、むなしさを身にしみて感じました。それは12歳の私にとって初めての、死との出会いの体験でした。葬式に参加しながら私は、生と死、生きがいなどについて深く考えさせられていました。

このように自分の中で悩みながらも、心の中の寂しさや悲しみをだれにも話すことができませんでした。勉強に身が入らない私は、英語、ギリシャ語、ラテン語の科目の試験に失敗してしまったのです。

「君は外国語向きではないな」と担任の先生からきっぱりと言われた言葉は、またしても私の心にぐさりとささりました。このとき私を励ましてくれたのは、外国語担当のB神父と文学担当のF神父でした。彼らは、友だちの死にショックを受けて沈み込んでいる少年たちに、毎日気配りと理解のある姿を見せてくれていました。

「だいじょうぶ、何とかなるよ。早く覚えても理解は浅い人もいるし、覚えが遅くてもふかーく理解する人もいるから…ね」私は彼らに励まされて、この時を乗り越えることができました。彼らの生き生きとした存在は、私にとって理想の姿となり、私は彼らにすっかり魅せられ、あのような人になりたいと思うようになりました。

②弘前市で12年間、障害児の通園施設と特別養護老人ホームで、夢中になって働きました。この12年間で、私に、宣教師として、また司祭としての魂を養ってくれました。キリストがすべての人間を救うためにこの世に生まれたということ、毎日目の前に起こる出来事や、接する人々の中に見ることができました。

障害を持ったり、さまざまな病気で苦しんでいる人たちの苦悩、またその状況におかれた人々に対して、どれほど、まわりの人が手をかす必要があるかということをつくづく感じました。そしてこの仕事を通して、元気な私たちもさまざまな欠点、病気、障害を持っていて、いつか、遅かれ早かれ他人の助け、救いを必要とするのだということを学びました。

③「君は外国語向きではないな」と言われた言葉をしばしば思い出しながら、宣教会の司祭としての使命を果たすために今こうして、いろいろな国の言葉を理解できるように恵みを与えてくださった神に感謝しています。これからもこの生きている神が私を裏切ることは決してないと、深く信じています。

ライモンド・ラトゥール（ドミニコ会 北仙台教会）

①司祭になる動機は

6歳の頃、私は自分の人生において三つの職業を目指していました。配達される新聞を書くようになること、また作家にもなりたいたはっきり望んでいました。子ども時代は信心深いほうでした。侍者の役割を果たさなかったにもかかわらず、いつか司祭になると思っていました。この最後の夢はしばらく夢のまま置いておきましたが、常に生きている信仰を探し求めました。20歳の時、新聞記者の務めを

果たしながらこの探究はかなえられました。神様の存在に関して深い関心を持って生涯神の恵みを宣べ伝えようという決心をしました。私の場合、信仰と恵みと司祭の呼びかけは一致していました。いつか作家にもなるのでしょうか。



②私が大切にしてきたことは私の歩みの中で、たくさんの方々の協力を得ました。実際に、ずっと信徒の力に頼っていたと思います。北仙台では、これを表すために次の表現を使いました。“司祭が弱ければ弱いほど、強い信仰の共同体となる”と。つまり、信徒たちの信仰の宝物を汲むように努力したのです。私の方から一方的に何も決めないように気をつけました。共に歩むこと、これが私の目的でした。しかし、この考え方をしつこく表現しました。教会の中には司祭の声だけではなく、信徒一人ひとりが自分の声をもっているの、それを聞かせてもらえる場を作ることを優先しました。教会の典礼の中でも、この声が聞こえるように働きました。ミサの中でも、皆でみ言葉を分かち合うことや宣教の使命を果たす体験が語り出されることがあってよいと強く思っています。北仙台の信徒と共に、このような教会の“ビジョン”に近寄るように努力しました。

③1986年6月28日に日本に到着して32年が経ちました。今年64歳になるので、ちょうど人生の半分を日本での宣教に捧げたことになります。10月1日にカナダに戻り、管区本部で働くことになりました。32年間の経験を一言で表現するのは難しいです。しかし、皆さまとの出会いによって力づけられ、多くの気づきをいただきました。心から感謝申し上げます。そして、行ってきます。

ドミニコ狩浦正義(名古屋教区、いわき教会)

①司祭を目指す動機は

大きくなったら男の子は神父さまに、女の子は童貞さま(シスター)に」と子どもづれの親たちのおしゃべりでした。10人兄弟の末っ子の私の母には、大切な兄がいて、神父でした。長崎教区の小神学校で院長を務め、毎年100余の中学、高校の小神学生を世話していた。夏休みの間、叔父神父は必ずマリアの被昇天の前日に帰省し、出身の教会でミサを捧げては帰院していた。叔父神父と顔が合うたびに、「神父になるか」の一言がくり返されていた。村中で、一番手におえない、わんぱくの私が「神父にな

る」とは一体どんなことかと、ただ不思議の思いであつたが、叔父神父はこのようにあいさつするのかと思うとうれしかった。

小学四年生になると、主任神父から「ミサごたえ(侍者)になれ」と命令され、「はい」と答えた。ところが、祭壇での奉仕でなく、平日の朝ミサの始まりを告げる「ホラ貝吹き」でした。5時までに目をこすりながら教会に急ぐ日々でしたが、ミサの始まりを知らせるのも「ミサごたえ」の大事な務めと思うようになった。ホラ貝吹きは、私にとって、お恵みいっぱい新しい一日の始まりであった。

六年生の終わりが近づいた日曜日のミサの中で、主任神父さまは、神学校修道会へ行く子どもたちの名前を一人一人呼び上げ「教会の皆さんにお祈りと日々の小さな犠牲を献げて歩みを共にしてください」と呼びかけていました。イエスさまの召命の恵みは、主イエスとの出会いの場に仕えるために派遣されるのではないのでしょうか。

②司祭として大切にしてきたことは

五島の福江島で生まれ、長崎教区の神学生として司祭への道を歩き出すが、第二バチカン公会議での新しいキリストの教会の姿に出会い、教えからキリストの福音にしっかり根づく日本で福音宣教の再発見へと突き動かされた。教区制度を堅持しながらも、日本における神の民の福音化が先ず優先されるのではないかと思い、名古屋教区での司祭として奉仕することを選びました。



生まれたところと一生をおくるところが同じところでなくなった現代、日本人のみならず外国の住民を隣り人とする共生が望まれる今、相手(他者)をとことん大切にするていねいな関わりこそ社会の福音化と言えないでしょうか。そのためには、福音の喜びは主イエスからの「エッファタ開け」祝福のことばで私たちを外へつれ出し、立たせそして前へ歩ませて下さるのです。



前田万葉大司教が、枢機卿へ

大阪大司教区で補佐司教2名が叙階、さいたま司教区、鹿児島司教区でそれぞれ司教叙階

6月28日の枢機卿会議で、大阪大司教区の前田万葉大司教が枢機卿に親任された。日本人としては6人目の枢機卿。それに続いて7月16日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂（玉造教会）で前田枢機卿の「親任報告」と併せて、ヨセフ・アベイヤ、酒井俊弘両補佐司教の叙階式が行われた。また、9月24日、浦和明の星女子中学・高等学校ジュビリーホールにおいて、山野内倫昭司教の叙階式が行われた。さらに、10月8日、鹿児島県文化センターの宝山ホールにおいて、中野裕明司教の叙階式が行われた。

大阪大司教区

トマス・アウグナス前田万葉枢機卿の略歴

1949年3月3日 長崎県南松浦郡新上五島町仲知に生まれる。
1975年3月19日 司祭叙階。
2011年6月13日 広島教区司教に任命される。
2011年9月23日 司教叙階。
2014年8月20日 大阪教区大司教に任命される。
2014年9月23日 着座。
2018年5月20日 枢機卿に任命される。



ヨセフ・アベイヤ補佐司教の略歴

1949年11月3日スペインに生まれる。クラレチアン宣教会入会。バルセロナで哲学・神学を学んだ後、日本へ派遣される。
1975年司祭叙階。名古屋教区、大阪教区で司牧に当たる。
1981年—1992年 同会、日本管区管区長。
2003年—2015年 同会総長。
2015年 日本に戻り、大阪教区で司牧。
2018年6月2日 大阪教区補佐司教に任命される。



パウロ酒井俊弘補佐司教の略歴

1960年3月23日、兵庫県に生まれる。
1976年 オプス・デイでの養成始まる。
1985年 スペインに渡り、神学校に入学。
1988年8月20日、司祭叙階。
1990年 日本に戻り、長崎教区、大阪教区で働く。
2018年6月2日 大阪教区補佐司教に任命される。



さいたま司教区

マリオ山野内倫昭司教の略歴

1955年12月8日、大分県に生まれる。
1964年 アルゼンチンに移住。
1975年 サレジオ会に入会（アルゼンチン）。
1984年12月21日、司祭叙階（サン・ホアン、アルゼンチン）。
1997年2月26日 日本へ帰国。その後、同会の学校、神学校などで働く。
2014年 同会日本管区管区長
2018年6月2日 さいたま教区司教に任命される。



鹿児島司教区

フランシスコ・ザビエル中野裕明司教の略歴

1951年4月15日 鹿児島に生まれる。
1978年4月 司祭叙階。小教区で司牧活動に従事。
1984年 ローマ・ウルバノ大学に留学し、教義学教授の資格を取得。
2011年 日本カトリック神学院の役職に従事。
2018年2月 日本カトリック神学院院長を務める。
2018年7月7日 鹿児島教区司教に任命される。



司教日程

12月	1日	土	東北新生園司教ミサ	2月	18日	金	宣教司牧評議会役員会
	3日	月	仙台教区司祭の集い		28日	月	司祭月例会
	4日	火	//		31日	木	学校法人理事会
	9日	日	仙台天使園		8日	金	広報委員会
	10日	月	子どもと女性デスク（東京）		12日	火	司教総会
	11日	火	司祭評役委員会・司祭団役員会		13日	水	//
			神言会管区長来訪		14日	木	//
	12日	水	司教会議		15日	金	//
	13日	木	臨時司教総会		16日	土	「差別と人権」東京カリタスの家
	14日	金	社会司教委、司教勉強会「改憲問題」		19日	火	司祭評定例会・司祭団役員会
1月	17日	月	仙台教区サポート会議、全ベース会議	3月	25日	月	地区別司祭の集い
	18日	火	//		6日	水	子どもと女性デスク
	20日	木	ウルスラ会来訪		11日	月	東日本大震災記念ミサ（元寺小路）
	24日	月	主の降誕ミサ		12日	火	司祭評役委員会・司祭団役員会
	25日	火	主の降誕ミサ		13日	水	カリタス釜石理事会
	27日	木	部落差別人権委・事務局会議（東京）		15日	金	いのちの光 3.15 フクシマ ミサ(原町)
	1日	火	神の母聖マリア祭日ミサ（元寺小路）		16日	土	いのちの光 3.15 フクシマ講演会(仙台)
	5日	土	ドミニコ会カナダの新管区長来訪		21日	木	教区広報委員会総会
	8日	火	司祭評役委員会・司祭団役員会		23日	土	オタワ会（誓願金祝）
	13日	日	小名浜教会ミサ		25日	月	司祭月例会
	17日	木	仙台教区人権を考える委員会				

編集後記

教区報の編集に携わるようになってから、仙台教区内でいかに活発な活動が行われているかを実感しております。この号から、元寺小路教会の関穀氏が新たに編集に加わって下さいました。やっと再刊3号目ですが、これからも、教区の皆さまと一緒に、元気に歩んでいきたいと願っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（Sr.長谷川 昌子）

ようやく再刊3号目を発行することができました。1年を通じて、4月、8月、12月の年3冊刊行というのは、本年の広報委員・地区広報委員総会で決まった方針でした。まずは、私たちが決めた方針が実行できてほっとしております。これからも、地道にゆっくり、歩んでゆきたいと思います。

（上野 隆）

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は、随時受け付けますので、下記のメールあてに添付ファイルでお送りいただければ助かります。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送り頂いても結構です。

sendaikyoukuho@gmail.com

皆様がたの積極的な投稿をお待ちしております。

次号発行予定日 4月7日（日） 原稿締め切り 1月末日